
京大上海センターニュースレター

第 204 号 2008 年 3 月 13 日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

○ 近代における西北回族の社会組織化の過程

○ 上海訪問記

+++++

近代における西北回族の社会組織化の過程

寧夏大学人文学院教授 霍維洮

1. 回族の形成と特徴

回族の形成過程は、唐宋の胡商・蕃客の中国における定住、元・明におけるアラビア人の中国に移入を経て、イスラム教をネットワークとする中国人と混住の民族共同体を形成したというものであった。

1.1 唐・宋の胡客と蕃坊

唐・宋の時期に外国商人の中国との貿易がさかんとなり、多くのアラビア人とペルシャ人が広州、泉州、楊州、南京と西安に定住した。そのうち、ある人が中国人と結婚して、“土生蕃客”が生まれてきた。彼らはモスクを中心として、集団の形で暮らすようになり最初の社会構造—“蕃坊”を形成した。

1.2 元・明時期における回回人の帰化

モンゴル軍隊の征西の後、大勢の回回兵士と匠人が軍隊とともに、中国に移住してきた。元代におけるいわゆる“四等人”制度の中にある“色目人”が主に回回人である。彼らが“隨地入社”を通して、元朝下の“編民”になった。明時代の数百年間にも西域からの回回人が絶えず東に遷移し、その多くが明政府によって西北の甘肅と青海省に配置された。

1.3 回族の中国における実情

数百年の融合を経て、回族が明朝の中葉に形成された。明王朝開国の初期には回回人の支持を得たため、回族に対して寛容な態度をとった。そのため、回族の経済と文化が急速に発展をした。清朝の前期には回族と漢族が同等視された。しかし、乾隆後期から、西北の回族が反清運動を起こしたため、清政府が回族の宗教勢力に対して圧力を加えるに至る。そして、それがまた、民族の衝突をますます激しくした。

2. 門宦制度の発展と社会衝突

清朝期には回族は長期にわたる反清反乱を頻繁に起こし、これは 20 世紀の中国学术界では“回民一揆”と称され、また“反封建・反民族圧迫の闘争”とも見られている。私の研究の結論は、これは回族社会組織の発展による中央集権制度との衝突であり、西北回族社会の持続的な政治的要求を表現したものであったということである。

2.1 西北回族の門宦制度の発展

門宦制度は元・明の教坊制の下で、“経堂教育”の推進によって形成された組織と権力のシステムである。清朝の康熙期から乾隆期までの間に生まれ、甘肅の河州(現在の臨夏)、寧夏、青海の西寧等の

地域に集中的に存在していた。イスラム教のソフィア派に所属する。

2.2 門宦制度の機能

門宦は実質的に以前には分散していた教坊を教主崇拜の形で結びつけることを通して、地域的な範囲の組織体系を形成した。その基本的な機能は①宗教活動の組織、②教徒と教坊の管理、③対外事務への対応であった。

2.3 門宦制度に由来する三つの衝突

門宦は教派の区分に由来したものであるため、各教派と門宦の間に教坊と教徒を争いあう衝突が生じた。これは“教争”と呼ばれた。また、門宦の教徒に対する管理と清朝地方政府による住民管理が互いに対立していたため、門宦と清朝の統治の間にも深刻な衝突が存在していた。その下で、回族の反清運動に民族運動が転化し、各民族の間にも民族衝突が生じるようになった。

3. 19世紀後半期における回族の反清朝運動

1860年代に、西北の回族は大規模な反清運動を起こし、約十年の間、回族の軍隊は現在の甘肅、寧夏、青海と新疆の四つの省の多くの地域をコントロールした。宗教組織が政権組織へと転換し、地縁の管理を実施し、民族的な地方自治を実現させた。

3.1 回民一揆とその勝利

回民一揆を通して、回民が寧夏と甘肅の大部分の地域および西寧地区と新疆の北部地区をコントロールした。この結果、清朝政府のこれらの地域に対する統治は全面的に崩壊した。

3.2 四大中心及びその組織構造—河州、金積堡、西寧、肅州（酒泉）

回民一揆は門宦組織を中心とし、回民の定住地を根拠地としていた。回民の最高リーダーはすべてが門宦教主の家庭成員であり、あるいは各レベルの阿訇と有力者であった。回族の軍隊組織は門宦組織の拡大と地縁的転化によって作られたものであった。

4. 門宦から回族軍閥への組織的成長

回民一揆の失敗後、多くの門宦が深刻な打撃を受けた。河州の回民軍隊の一部の将領が投降したため、この地域にある門宦組織が残されることとなった。馬占鰲、馬福祿、馬海晏などのリーダーたちが政府の力を借りて、門宦に打撃を与えたと同時に、回族の力を借りて、重用された。そのため、清朝末期の約30年間に地方的な回族軍事集団へと成長した。

4.1 門宦の衰退と軍事集団の突起

寧夏金積堡にある馬化龍門宦、西北華寺門宦である馬桂源と肅州集団は全て清朝軍隊によって鎮圧されて、その組織が崩壊し、その構成メンバーもばらばらになってしまった。河州の馬占鰲などが清朝政府に投降した後、政府の“以回治回（回民の自治）”の方針によって、民族的な軍事勢力が形成された。

4.2 回族軍閥の甘肅、寧夏と青海に対する統治

辛亥革命の後、清朝政府の西北部の統治が崩壊するに伴い、回族の軍事集団がこれをきっかけに甘肅、寧夏と青海に対する統治権を手に入れた。馬安良が蘭州を占領し、馬福祥家族の寧夏に対する統治が40年近くわたり、馬麒氏の青海に対する統治が1949年までに至った。

4.3 多民族住居地における回族の社会組織の変化趨勢

- ① 反抗から結合へ—民族勢力がしばしば地方的な勢力に転化し、最終的には中央集権的な制度を持つに至ったということ。
- ② 多民族の参与—多民族住居地という現実、あらゆる民族的な統治の実現が他民族（特に、漢族）の力を借りなければならないということを決定的にしたということ。
- ③ 宗教から政治への転換—宗教的制度化と組織化は必ず政治形態へ転化し、ときには政治勢力が宗教勢力を取り替えるケースもあったということ。

（この文章は去る1月31日に行なわれた上海センター・セミナーに提出されたものの和訳である）

上海訪問記

経営管理研究部教授 徳賀芳弘

昨年、12月25日より28日まで上海を訪問しました。何度も先方に連絡を取り、予定が決まったと思うと変更になったり、しばらく音信不通になったりと、なかなか日程が決まらず、苦勞の末にようやく実現したという感じです。中国訪問の難しさを痛感しました。

上海に到着した日は光化学スモッグのせいか、空は灰色でしたが、残りの日々は晴天に恵まれました。私の訪問の目的は、①日中の会計制度改革に関する研究（復旦大学の李教授と私がそれぞれの会計制度改革について報告をして討論をする）、②中国の公認会計士事務所でのヒアリング調査（上海公認会計士事務所という老舗の事務所でヒアリング。会計ルールが頻繁に変更される中国で公認会計士はどのような対応をしているのか）、および③日本の公認会計士事務所でのヒアリング調査（望月コンサルティング・ファームでヒアリング、日本企業はどのような対応をしているのか）でした。

まず始めに訪れた復旦大学では、私が「日本の会計制度改革」について報告をした後、復旦大学の李教授が「中国の会計制度改革」についてお話しされました。事前の打ち合わせでは、私の報告・討論の時間はわずか30分程度しかなかったのですが、報告に対する質問が相次ぎ、1時間半も延長されました。これほど、日本の会計制度に対する反応があるとは思ってなかったので、正直驚きましたが、うれしくもありました。参加者の大学院生（博士課程・修士課程の合計11人）たちはすべて社会人でしたが、非常に活発に発言し、納得するまで何度も質問してきます。日本の会計関係者にとっては常識となっていることも彼らにとっては新鮮で不思議なことが多いようでしたし、私にとりましても、中国の合併会計基準のユニークな点や上海の土地の使用権料の上昇とその会計問題は大きい学問的な興味をそそりました。

李先生は、「当初、日本の会計に興味はなかったが、日本のバブルの失敗を繰り返さないために、日本から学ぶことにした」と言われていました。ネガティブな研究材料とされることは不本意ですが、今後、意見交換の機会が増えることは喜ばしいことです。日本のバブル期の分析については、17年前に米国ワシントン大学で報告をしたことがありましたので、さっそく加筆修正をしてお送りすることにしました。

翌日は、望月コンサルティング・ファームと上海公認会計士事務所でお話を聞きました。望月所長（公認会計士）が同志社大学のご出身であることから、すぐにうち解けて、かなり突っ込んだ話もできました。他の中国企業と同じことをしていながら、地方政府や中央政府から違法行為として廃業させられた日本企業のケースなどのお話（怖い話が多かったですが）も聞くことができました。彼によると、日本企業にとって最も重要なことは、地方政府とのコネクションを結ぶことだとか。

老舗の上海公認会計士事務所（上海で最も歴史のある事務所）では張副所長が、上海のマナー熱気について3時間近く話してくれました。彼らは、現在の中国の好景気がバブルなのではないか、もしそうだとするといつそれが崩壊するのかという「不安」を抱いているようです。

上海証券取引所も訪問しました。すべてが電子取引となっているため、1000席を超えるディーラー席はカラでしたが、アジア最大の電光掲示板に取引が映し出されていました。一昨年の11月から昨年の11月までで発行済株式の時価総額が4倍となり、世界でも類のない（日本のバブル以上の）資本市場の成長があったようです（その後、ご存じのように、上海市場も東京同様に暴落しますが・・・）。

上海は一昨年訪問した北京や香港とはまるで違う都市でした。現在も急速に建設が進む摩天楼。中心部に並ぶブランド・ショップ（私の観察した限り、日本の1.5倍くらいの価格がついています）。揚子江の支流を挟んで立ち並ぶ巨大なネオン・サイン。あの、町中に充満している異常な熱気には心底驚嘆しました。この熱気はいつまで続くのでしょうか。誰もが、struggle for money という感じがします。1920年代から30年代の金融都市上海が復活したのでしょうか。

※今回の上海への出張は、京大上海センターの予算によるもので、私の出張をご承認頂いた、山本センター長をはじめとする運営委員会の皆様には感謝申し上げます。